

荒谷 卓(あらや たかし)
 生年月日:昭和34年秋田県出身
 略歴:昭和57年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。
 海外留学:ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
 平成21年9月~30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
 平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会:熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
 著書:「戦う者たちへ」並木書房 / 「自分を強くする動かない力」三笠書房 / 「サムライ精神を復活せよ」並木書房
 熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>



日本の戦闘者

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
 代表: 荒谷 卓



空挺勤務間に、自衛隊の中に日本を愛する本物の戦闘者が全力で任務遂行に当たれる部隊、すなわち特殊部隊の創設を決意した後、1995年から1997年の間、ドイツへの留学の機会を得た。いわゆる防衛交流の一環で、かつては「戦争論」で有名なクラウゼビッツが学校長を務めていたドイツ連邦軍指揮大学(フェールングス・アカデミー)、自衛隊というCGS(指揮幕僚過程)に相当する軍学校での教育を外国の軍人に開放し留学生を招致するプログラムである。日独間の軍事留学生の歴史は長く、日清戦争での軍功著しい川上操六大将や日露戦争の軍功者乃木希典大将などもドイツ軍大学留学生である。

この時期は、まさに冷戦崩壊による防衛見直しが行われており、対ソ戦略のためにつくられたNATO(北大西洋条約機構)も根本的にその目的を見直していた。特にドイツ軍は、それまでのNATO軍の中だけで軍事作戦をするという戦後軍事体制を見直し、ドイツ軍単独の作戦やNATO域外の軍事作戦も遂行できるよう防衛構想の大きな転換を図っていた。実際に、1997年、アルバニアで生じた国内暴動に際しては、ドイツ軍単独で自国民救出作戦を遂行し、ドイツ国民13名を含む130名(日本人14名を含む)の救出を1日で成し遂げた。ドイツが戦後体制を脱却した決定的瞬間だった。

また、ドイツ軍は防衛構想の転換に伴い、戦車主体の機甲部隊をなくし歩兵部隊へと転換するなどの戦力見直しも思い切って進め、空挺部隊を廃止し特殊部隊KSKの創設に向け準備中であった。俺は、絶好のチャンスとばかりKSKの創設についてKSKのオペレー

ターから直接情報を収集することができた。このことは、帰国後大いに役立つこととなる。

ドイツ留学を終えて日本に戻った俺のポストは、陸上幕僚幹部防衛部研究科研究班長期防衛見積もり係であった。陸上自衛隊では、防衛力整備に当たってPPBS(プランニング・プログラミング・バジェットシステム)を採用している。プランニングという長期戦略を立て、プログラミングという中期構想におとして、年度ごとのバジェットを確定するという仕組みだ。

俺の仕事は、このプランニングという長期戦略を作成する部署だ。それは俺にとって、打って付けの仕事であった。大方の役所の業務というのは、予算や制度に係るもので、法規に則り、理屈をうまく作って予算を獲得して組織を拡大し、役人たちが良しとする法律や制度を作る仕事だ。現状を基にして、合理性、論理性が支配する業務である。これに対して、戦略部門の業務というのは、将来の在るべき姿を描き、そこへ到達するための道筋を考察するもので、合理性や、理論性を無視するわけではないが、現状にとらわれる必要はなく、理想的未来構築への創造性が重視される業務である。俺は、性格的にも現状にとどまることが嫌いで、常に未来を切り開くことをしていないと気が済まない。戦略的発想をもって創造性ある仕事をする長期防衛見積もり係の仕事はぴったりと俺の性に合っていた。

何よりも、戦後自衛隊の防衛力整備の枠組みには存在しない特殊部隊を創るにはもってこいのポジションである。特殊部隊というのは、軍事的合理性のみで作戦する陸軍、海軍、

空軍などの軍種とは全く別の作戦職種である。特殊作戦は、強い政治性を持ち、外交や経済など広範な効果と影響を考慮した作戦を遂行しなくてはならない。これは全く新たなチャレンジャーであった。

間もなく長期防衛見積もり係長になった俺は、陸上自衛隊の戦力構成全般の見直しを提言する文章と資料を作成した。その中の一つに特殊部隊の創設があった。物事を変えるときには反対と抵抗はつきものだが、特に特殊部隊の創設は困難を極めた。限られた防衛費の中で新たな部隊を創設するという事は、いわゆる予算の取り合いが生じる。また、自衛官でありながらレンジャーと特殊部隊の違いが判らない人達にその説明をして理解してもらうのだけでもかなりの時間と労力を要する。さらに、安全管理には異常に厳しい陸上自衛隊の中では、近接戦闘射撃はもとよりファストロープでさえ「手を離したら危ないじゃないか」と言って反対する人ばかりだ。周りにはみんな反対している状況の中で、俺は部下に対し「俺たちが陸上自衛隊を再生するんだぞ」と檄を飛ばしたもんだ。

多くの問題の一つ一つクリアして、ようやく公文書に「特殊部隊」の文字が入ることになるまでには、長期防衛見積もり係員の多大なる努力があった。

その後、俺は、防衛庁防衛局防衛政策課に勤務し、北朝鮮問題の担当や防衛大綱のもとになる防衛力の長期的整備構想の作成を担当することとなる。ここでも、冷戦後の新たな世界情勢に応じた防衛力の根本的見直しを提案し、その中で特殊作戦の必要性をうたった。それを仕上げた後は、陸上幕僚監部に戻り防

衛部防衛班の先任に就いた。防衛班というのは、プログラミングを担当する部署で中期防衛見積もり等を作成する。特殊部隊は「特殊作戦群」という名称で中期防衛力見積もりに組み込まれた。これで特殊部隊の創設はほぼ現実的なものとなる。

実際に特殊部隊の創設準備に取り掛かるにあたって、特殊部隊の知見がない陸上自衛隊としては、米国の特殊部隊(グリーンベレー)に要員を留学させ、そのノウハウを習得することとなった。そして、指揮官候補の選定に入る。それまで特殊部隊の創設には反対をしていた人も含め何人かが手を挙げた。どれも知っているメンツだった。俺は、一つ提案をした。「特殊作戦群の指揮官になる者は、グリーンベレーに留学することを条件にしよう」。案の定、みんな手を下げた。特殊作戦群指揮官の候補は俺だけになった。

俺が、特殊作戦群長候補として米留が決まるやいなや、上司の君塚防衛課長(当時)がこういった。「荒谷。お前はいくら体力があるといっても留学先はグリーンベレーだから。途中で帰ってくるわけにもいかないから、レンジャー能力をブラッシュアップするためにあらためて空挺レンジャー過程に入校しろ」。俺は言った。「課長。了解! では、防衛班の先任業務はしばらく空けますね」。そしたら課長が答えた。「いや。両方やれ」。

ということで、火箱空挺団長(当時)に挨拶に行くと、「よし。階級は関係ない。レンジャー学生の中にはいって同じようにしっかりやれ」。1等陸佐(大佐)のレンジャー学生ははじめてだったろう。俺も教官・助教もやりにくいでしょうがない。ハイボート、口



レンジャー課程同期が作ってくれたTシャツ

一歩訓練、戦闘卸下、障害走、習志野や青木ヶ原でのコンパス等若い空挺兵とともに汗を流す。やってみて自分でも驚いたが、40歳の割にはかなり体も動かし体力もあった。長谷川恒男カップ日本山岳耐久レース等に参加して体力錬成に怠りなかったのが功を奏したようだった。

これで、心身共にグリーンベレー入校の準備は整った。生憎、留学の経費は集団外旅という枠組みで、日当10ドル程度しか出ない貧乏留学だったが、陸上自衛隊に、本物の特殊部隊「特殊作戦群」を創設すべく、自分の全財産をもって米国に渡ることとなった。



2枚とも筆者の空挺レンジャー時のもの。



ドイツ留学時の集合写真。筆者は左上。



ドイツで各国学生と山登りのレクリエーション活動。